しらおい再発見

地　域　学　講　座

7　竹浦地区

竹浦地区特産の根曲がり竹

しらおいのまちを歩いてみませんか

2017年３月

民族共生象徴空間整備による

白老町活性化推進会議

７　竹浦地区

内　容　竹浦コミセンから竹浦神社、旧竹浦小学校、竹浦駅前ほかを歩きます

ルート　①竹浦コミセン　⇒

②竹浦神社　⇒

③竹浦駅前、旧国道　⇒

④旧竹浦小学校

竹浦の生い立ち、地名の由来

＊竹浦の地名は、昭和１４(1939)年の北海道庁告示の字名改正により、旧敷生村が萩野、虎杖浜とともに分字した際に新たに生まれたもの。白老村は当時、社台・白老・敷生の３大字に分かれ、社台村には１５、白老村には３４、敷生村には３３、計８２もの小字があった。戸数、人口ともに増加してきたのを契機に字名を改正、地番を整理することとし、社台・白老・森野・石山・萩野・竹浦・虎杖浜の７字とした。

＊竹浦に入った旧字地名は、フシコメップ、メップ、ポロナイ、クッタラストビウス、シキウ、ルイトケ、トビウ、サルフト、ネップ、ポンナイ、トビウス、チカヒラ、チカラフル、飛生、モシキウトビウ、モシキウの１６小字で、竹浦は一旦、新字名として竹生（チクブ）と決定したが、後に竹浦と変更された。

＊敷生はアイヌ語で「葦（アシ)」を意味するが、松浦武四郎は「オニガヤ多い」の意としている。また、現在の竹浦あたりは古称をメップといい、これはアイヌ語でメップナイ「寒い川」、あるいはメム「清水が湧いてできた沼で、魚が多くいるところ」であるともいわれている。一方、飛生（トビウ・トピウ）の語源には定説がなく、「黒い鳥」、

あるいは「竹多い」の意ともいわれる。

①　竹浦のおいたち

＊敷生に何時頃から人が住み着いたかは定かではないが、最も古い文献とされる寛文９(1669)年『津軽一統志』に「しきう 狄おきな オカツフ持分 家５～６軒」とある。その頃のシキウは現在の北吉原で、当時すでに松前藩が毎年１回、夏に船１艘を送り交易していた。また、文化５(1808)年の『東蝦夷地各場所様子大概書』には、「メッフ 蝦夷家数５軒 此人数３１人内乙名なし 小遣役１人 蝦夷家前メッフ川にて９月に至り候得は鮭漁事仕 日々シキウ番屋へ配り交易仕候 漁事宜候節は凡百束位 不漁の節は５０束も算相成候」とある。

＊弘化２(1845)年の『初航蝦夷日誌』（松浦武四郎）には、「子ッフ、メッフとも云 夷人小屋１軒有 少行凡１０丁 此間フシコベツと云字有 川有 船渡し川幅凡６０間斗 西岸に樹木多し 蝦夷人１軒渡り守する也 渡りて小休所有る也」とある。さらに安政３(1856)年の『廻浦日記』（同）には「此所昔は１～２軒有し由が今は１軒もなし」とあり、当時この地方の中心地は敷生川を上る鮭漁のためにできた集落のシキウ（現北吉原）であったことが知られる。

＊明治１１(1870)年、白老郡と大字三村ができ、白老に各村戸長が置かれたのは同１３年２月。この年開拓使は初めて正式に戸口調査を行うが、これによると敷生村は７０戸２７６人となっている。

＊敷生村に初めて移住した和人は、慶応３(1867)年４月の富士源吉で、次いで明治４(1981)年の紺野助八・甚作である。ともに岩手県の人であるが、彼らが入地したのは本村と称せられる現在の北吉原で、当時無人のうっそうとした森林地帯であった。

　一方、竹浦（メップ）に最初に移住した人は、明治１４(1991)年、苫小牧樽前からの滝谷文吉（青森の人）で、次いで同２２年に浅野農

夫（福島人）がホロナイに定住し開拓に従事した。飛生には２４年の長谷川駒蔵（大阪人）が最初である。

②　敷生駅開業

＊明治２５(1899)年、室蘭・岩見沢間に鉄道が開通、白老に次いで新駅「敷生」（現竹浦駅）が開設されたのは、同３０年５月であった。当初、駅は敷生コタンに設置される予定であったが、敷地の所有者が反対したためメップの現在地に変更されたという。

＊メップに駅が開設されると、各地から移住者が目立ってきた。開駅後まもなく田辺松太郎が輪西より駅前に進出して呉服・米味噌・雑貨を扱う商店を開業した。その後、加藤常治もシキウ本村（敷生橋付近）より移転して商店を経営したが、その前後には小塚梅吉、竹田伝助、石田弥三らが来住開業したため、駅前付近は市街地化していき、メップは敷生村の中心地となっていった。

③　敷生小学校

＊明治２２(1889)年開校の敷生小学校（児童２５人）は２４年１０月、敷生村本村に２教室と職員室、教員住宅を併設した校舎を新築したが、３９年、メップ方面からの児童数に対応してフシコメップ（禅照寺と鉄道の中程）に移転した。この間３５(1902)年に敷生郵便局が、３９年には敷生巡査派出所が開設された。

④　敷生村の隆盛

＊明治３５年４月２９日の北海タイムスには「敷生村２５０戸、うち農業７０、漁業２０、商業６、木材商４、酒造１、請負業１、旅人宿２、馬追業４０、豆腐屋２、理髪業２、五十集物２、運送業２、牧商２、炭焼３０、大工５、鍛冶２、医師１、教員１、僧侶２」とあり、

農林業と漁業を生業とした家が多く、近傍は豊富な樹林地で、伐採した角材を鉄道で送った。この年、枕木として３０万本以上を出荷した記録もあり、またマッチ軸工場も２ヵ所あった。

　また、漁業では明治１４(1881)年の滝谷文吉・白銀ヤエカトク、２０年代に保田彦吉、３０年代には宇井平五郎、遠山久作、小林長太郎、栗田亀蔵、平田勘次郎、小見藤次郎、東峰国助、小堤熊太郎、飯田栄次郎、４０年代には前田善次郎、東峰春吉らが入植し、建網、引網、ホッキ貝など遠浅漁業が多かった。

＊大正５(1916)年アヨロ漁業組合設立に参加し専用漁業権を取得。その後、川崎船を導入し随時沿岸漁業として沖合へ進出した。なお、明治２９(1896)年クッタリウスの岩手県人紺野甚作を頼って来住した熊谷永助は、この地方の漁獲物を一手に引き受けた。また、農業では前掲の浅野農夫をはじめ、明治３２年以降、山ホロナイに山本兼松、西村留蔵、佐々木文之助、野西福松、冨川定吉、星義春、渋谷直松、遠藤運次郎、メップ沢に池田八左衛門、高野省三、原口熊平らが入地した。

＊飛生には大正時代に栄えた敷生鉱山があり、宮地静馬、武田与市、山下徳太郎、勝沼絹治、兼近平太郎、兼近幸次郎、知里伊久太、岩倉菊五郎、桜井藤次郎、米田小作らが牧場を開いた。また、鈴木源太郎は造材業を営む傍ら雑貨店を開き、この地の発展に力を尽くした。さらには岩倉組の岩倉巻次もこの地で製炭業を営んでいた。

⑤　地竹の生産地

＊有名な地竹も大正初期から切り出したようで、紺野富三が竹を編んで竹籠を製作して売

り出し名を挙げたことから、竹細工が広まったというが、竹浦が「根曲り竹」の名産地としてクローズアップされたのは、開墾が進んだ全道各地に、豆や長芋が多く作られるようになった大正中期頃からで、主に手柴として需要が増したことによる。昭和９（1934）年には白老村全体で１５１，３５０束（1束５０本）が出荷された。

＊竹浦の地竹は積雪量が比較的少ない上、雪解けが早く、適当な潮風を受けて生育するため、他地区産のものに比べて表皮が固く、節間も短く良質と言われる。昭和３０年頃が最盛期で、貨車４両から５両を連結し、年間６００万本が竹浦駅から洞爺湖周辺や北見方面に輸送された。しかし、３０年代後半から豆の生産量低下に加え、竹資源の減少が重なり出荷量は減ったという。

⑥　敷生鉱山の盛衰

＊飛生の奥地に褐鉄鉱が埋蔵されているのが最初に見いだされたのは大正３(1914)年。翌４年、北海道製鉄㈱が本格的に採掘に取り掛かった。時は第一次大戦で需要増のため、日本全国で鉄山が開発されていた。

山元及び白老鉱山から採掘された鉱石は空中ケーブルで約６㎞運搬集積され、荷車で敷生駅まで運ばれたが、後にこの地点（終点）から敷生駅までレールを敷き、蒸気機関車で本線に連絡し室蘭輪西製鉄所まで送られた。当時の新聞によれば採鉱夫数百人が従事し、終点には鉱山作業員住宅が３０ほど建設され飲食店もあって賑わい、医師１名も常駐していたという。この影響で敷生駅前市街地にも飲食店や接客業が５～６軒でき、接客婦も３０名余りいたという。

敷生鉱山軌道終点

しかし、この盛況も鉄価格の下落とともに大正９年を限りとして突

如休山となり、レールの跡はそのまま道路となって「終点」の名だけが残った。鉱山は昭和２６年頃一時再開されたが、３年後完全閉山となった。

　敷生鉱山跡地は毛敷生川の支流赤川の上流海抜３４０ｍの地点にあり、今も残る鉱石貯蔵場やケーブル施設の礎石が根曲り竹の群落に覆われている。

⑦　竹浦の火事

＊白老で記録に残されている比較的大きな火災は９回ほどあるが、うち４回は竹浦である。

１　敷生駅舎・官舎全焼

・明治３９(1906)年３月２０日午後７時４０分頃、敷生駅から出火し駅舎及び官舎５棟を全焼した。原因は駅事務所備付のストーブ煙突からの火の粉が屋根に飛散して発火したもの。当時はまだ消防体制も設備もなく、その上、井戸の深さは６ｍあり給水も思うに任せず、この火災がきっかけとなって組織消防について議論が高まったという。

２　敷生駅前中心街全焼

・大正９(1920)年１２月２０日午前１時３０分頃、敷生駅前加藤正吉宅より出火、メップ市街地の大半２５戸が全焼した。焼失したのは敷生巡査駐在所、敷生郵便局、竹田医院、長谷川旅館などで、幸い人畜被害はなかったが、損害額は１１万円といわれる。真夜中のことであり当時は手の施しようもなかったが、白老最大の火災となっている。

３　鉄道官舎全焼

・大正１３(1924)年３月１５日午前１０時４０分頃、鉄道保線官舎より出火。折からの烈風に煽られ、１４戸を全焼し１２時に鎮火した。公設消防組は前年組織されていたが、３日前に小火があり、そのままポンプを放置していたため使用できず大火の原因になった。

４　敷生郵便局焼失

・昭和７(1932)年７月２２日午前４時頃、敷生郵便局風呂場から出火、局舎と局長宅を全焼した。幸い地元消防組の素早い行動と近隣消防組の応援で類焼を免れたが、公金１５０円、郵便切手２００円はじめ書留郵便などを全部焼失した。

⑧　戦後の飛生開拓団

＊昭和２２年５月、飛生地区に日鋼開拓団と第一次東京開拓団の３団体が入植し、次いで同年９月に第二次東京開拓団が入地した。日鋼開拓団は兵器を製造していた日本製鋼所が敗戦による事業縮小のため開拓者を募ったものであり、東京開拓団は東京空襲により焼け出された人たちと外地からの引揚者の集団であった。

＊飛生小学校は、開拓団の子弟教育の必要性から昭和２４年、児童数１４名で開校したが、同６１年３月、１３６名の卒業生を限りに惜しまれつつ閉校した。

⑨　サカタランドの夢

＊竹浦の高台に道内随一のレジャーランドが建設されるというニュースが流れたのは昭和４４年３月であった。４月初め、坂田工務店（本社伊丹市）より代表者が計画書を携え来町し町長に面会。買収した２２０ｈａの土地に４４年度は５億５千万円で展望台、ホテル、従業員宿舎などを建設し、翌年度には温水プール、クマ牧場、乗馬クラブ、子どもの国、熱帯植物園などを５億円かけて施設するというものであった。

同年６月に着工され、高台は平地と化し翌年６月には高さ５０ｍの展望タワーが姿を現した。そして周辺には全長３㎞、幅１０～３０ｍ、全国６番目、本道初のレース場「北海道スピードウエー」が完成した。

７月５日「北海道スピードウエーオープニング大会」が開催され、１万５千人が入場したため、国道は混雑を極めた。

しかし、当初の計画はいつしか変更され、一大レジャーランドはカーレース場と化し、１日で３万人を動員したこともあったが、３年間でレースは中止された。サカタランドは倒れ、日本一のレジャーランド構想は夢と消えた。原因は高台を舞台とした詐欺事件ともいわれる。

当時、展望台脇に建立されたアイヌ像はポロト湖畔に移され、今はコタンコルクル（村長）として、往時の夢を物語っている。

敷生中央青年会

飛生アートコミュニティー

＊飛生アートコミュニティーは、１９８６(昭和61)年３月に廃校となった町立飛生小学校とその校舎敷地を「芸術家の創作及び交流の拠点として活用したい」とのＴＯＢＩＵ会（國松明日香会長）からの申し出により創設された。以来、四半世紀の間に木造校舎や体育館は「展示室やアトリエ」に、教員住宅は「居住空間」に、校舎敷地は美術作品や音楽の鑑賞スペースとして散策路等が設けられ、「飛生の森づくりプロジェクトとしての整備」が図られてきた。

一方、同会では「芸術・文化を通した地域への貢献」も使命と考え、地域に向けた数々の美術展、コンサート、ワークショップなどを企画・運営し、近年はその活動が若手芸術家に引き継がれ、飛生の大きな魅力である自然を取り込んでの「ＴＯＢＩＵ－ＣＡＭＰ」や、新たな芸術の醍醐味を「飛生芸術祭」として昇華させた、

また、芸術家が滞在し地域の人たちと交流しながら作品を制作する「白老滞在型ワークショップ」や、アーティストが講師となって指導する「美術教室 いろどり」などが、四季を通じて行われてきた。このように同コミュニティーは、子どもたちの成長の場であった学校が、いつしか芸術家たちの研鑽の場、地域との交流の場と大きく様変わりさせながら、本町の芸術をけん引し、文化の向上に大きく貢献する「生涯学習の場」となっている。

飛生アートコミュニティー（旧飛生小学校）

開校：１９４９年（１４人）、閉校：１９８６年（９人）

活用開始：１９８６年、活動主体：ＴＯＢＩＵ会

設立メンバー：國松明日香、伴節夫、伴百合野、勝美渥、大野重夫、流政之

ＴＯＢＩＵ会メンバー（分野：加入年）

國松明日香（彫刻家`８６）、伴節夫（造形作家`８６）、伴百合野（日本画家`８６）、勝美渥（洋画家`８６）、

大野重夫（版画家`８６）、流政之（彫刻家`８６）、田中照比古（画家`８８）、新井睦昭（家具作家`９０）、細井護（彫刻家`９７）、

國松希根太（彫刻家`０２）、伴翼（彫刻家`０３）、奥山三彩（彫刻家`０７）、鈴木孝太（音楽、版画`１０）　＊現在１４人

飛生地区／飛生アートコミュニティー略年表

１８９１（明治２４）年	最初の移住者が入植し造材業や製炭業、牧場などを営む
１９１４（大正３）年	飛生奥地に鉱山が発見される（敷生鉱山）
１９１８（大正７）年	第一次世界大戦により敷生鉱山が盛況となり軌道（トロッコ貨車）が敷かれる
１９２０（大正９）年	鉄価格が下落し敷生鉱山が休山。鉄路は廃止される
１９４５（昭和２０）年	戦後の食糧危機を打開するため、政府が「緊急開拓事業実施要領」を策定
１９４７（昭和２２）年	東京開拓団と日鋼開拓団の約３０戸が入植
１９４９（昭和２４）年	飛生小学校創立。１４人が入学
１９６０（昭和３５）年	児童数が最多の３４人となる
１９８３（昭和５８）年	北海道より「愛鳥モデル校」の指定を受ける
１９８６（昭和６１）年	児童数の減少により飛生小学校閉校、最後の卒業生４人が巣立つ。（児童数９人） ＴＯＢＩＵ会・飛生アートコミュニティ－ﾃｨｰ創設。「ジャズとシャンソンの楽しみ」「巣箱づくり教室」開催
１９８８（昭和６３）年	「國松登と飛生の画家や彫刻家たち展」「ＪＡＺＺコンサート」「クラッシックコンサート」開催。
１９９７（平成９）年	「第２回ＴＯＢＩＵアートコミュニティ－展」開催
２００５（平成１７）年	「ＴＯＢＩＵ－２０周年展」開催
２００９（平成２１）年	「飛生芸術祭」開催。～現在まで継続して開催～

２０１０（平成２２）年	ロゴマークを一新
２０１１（平成２３）年	「飛生アートコミュニティ−創設２５周年記念展」開催。「ＴＯＢＩＵ－ＣＡＭＰ」開催。～現在まで継続して開催～
２０１２（平成２４）年	「飛生の森づくりプロジェクト」により散策路等の整備を開始
２０１４（平成２６）年	第１０回日本都市計画家協会賞「優秀まちづくり賞」受賞
２０１６（平成２８）年	飛生アートコミュニティ−創設３０周年

竹浦コミュニティセンター

竹浦神社鳥居

竹浦神社

ＪＲ竹浦駅

竹浦小学校

旧竹浦小学校

根曲がり竹の出荷

竹浦地区の町並み（竹浦駅前付近）

竹浦地区旧国道

飛生アートコミュニティ

禅照寺

禅照寺

白老カーランド（旧サカタランド）レーシングコース

編　集　民族共生象徴空間整備による白老町活性化推進会議

監　修　白老町教育委員会生涯学習課

問合先　仙台藩白老元陣屋資料館　TEL0144-85-2666